

編 集 後 記

ソ連・東欧のペレストロイカの急速な進展は、20世紀の世界構造の基盤的な転換を示唆するエポックメイキングなアクシデントで、自由化路線は広範な民衆に支持されており、その展開の基本的スタンスは今後も変わるものではないが、政策的動揺や政権の変動など、今後もゆりもどしを伴って不安定が続くものと予測される。それ自体が社会科学の重要な研究対象であり、研究者の研究意欲をそそるものといえる。

このような動揺が、世界の緊張緩和と軍縮を主導する新たな情勢の始まりと認識されていた矢先、世界第4の軍事大国イラクによるクウェート侵略が開始された。それが、緊張時代の後遺症としての終わりなのか、緊張緩和時代における群雄割拠構造の始まりなのかははまだ断定できないが、2超大国体制の崩壊と超大国の弱体化による世界の警察的役割の衰退の間隙を縫ったことはいうまでもない。そして、これが国連にとってもまったく新たな試練となりつつある。

わが国もまた、世界最強の経済大国の位置にありながら、その政治的役割の発揮が余りにも過小であることを、内外から告発される事態を迎える可能性がある。

このように考える時、国際地域研究にかかわる研究所としては、新しい重要な研究素材がますます多様に迫ってくるという感を深める最近である。

このような時期に第7号を発刊することになった。今号は、4本の論文で構成されており、従来からすると論文数において少ないが、いずれも各分野からの長文の力作が揃ったと自負している。

諸般の事情で例年より発刊が遅れたことをおわびしつつ、編集後記とする次第である。

文責 板東 慧

国際研究 7

1991年1月10日 発行

編集発行 中部大学国際地域研究所
〒487 愛知県春日井市松本町1200
電話 <0568> 51-1111(内線579)

印刷所 名古屋リプリント
〒462 名古屋市北区大曾根-9-26
電話 <052> 915-8922

編集委員

板 東 慧
菊 池 努
今 福 龍 太